

令和4年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日 時：令和4年6月3日（金） 14：00～16：00

2 場 所：オーテピア4階 研修室

3 出席者：

〔委員〕加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

〔オーテピア高知図書館〕山崎高知県立図書館長、高石高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①報告

第2期オーテピア高知図書館サービス計画の策定について〔資料1・2〕

②協議

オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況及び第1期計画の総括について
〔資料3～5〕

【委員】

それでは、ただいま事務局から説明のあった内容について委員の方々から意見をいただきたい。

【委員】

●本題に触れる前に、昨日今日と委員と一緒に、県内市町村の図書館を回ってきたことについてちょっと触れておきたい。

趣旨は、特に現在、新規開館、新整備に向けて稼働中の市町村の状況というのを把握するというのが一つと、もう一つは、そういったところでもたついている部分を何とか後押しできないかということ。それから、せつかく新しいものを作るなら、より効果的な、オーテピアが目指してるような方向性を持った図書館になっていただきたいというようなことも含めて、お話ししたいと思い回ったもの。回ったのは四万十町図書館、土佐市立、香美市、高知市の分館。香美市は工事中で躯体はできているので、これから中に入れる程度の状態になっている。

それぞれいろいろ課題もあったり、良いところもあったりする中で、特に四万十町の場合は、皆さんご存知のとおりだと思うが、議会のほうとの調整が今ひとつうまくいっていない。このことについてはどのような対応をすればよいかというヒントになるような話をした。

教育長や教育委員会の担当の人たちと、ある程度はお話できたと思う。後はどう活用していただくかで、ぜひ頑張ってもらいたい。今ある予算でできる範囲で建築することになると、材料費等が高騰している分だけ面積が小さくなる。現在2,000平方メートルで美術館併設という状況でそれをさらに減らすとなると、か

なり小さな図書館になってしまうわけだが、できればそういうことは避けたい。

土佐市の場合には非常に楽しかった。天井も高く、書架が低くて、すごく環境がいい図書館。ただし、現在資料費が2,000万円だが、本来だったら400万円になっていたはずだという話。本来、市単位で考えたときに400万円の資料費はありなのか。何かの機会を捉えることができるんだったらその度に、「資料費のことについて少し考えてもらえないか」ということを土佐市の関係筋に話をしていくことを、県立として努力していかなければならない。せっかくなのでできていて、それが、数年で陳腐化していくのは非常に情けない。

香美市については、施設がかなりいい感じでできている。図書館に対する考え方について、教育委員会サイドは住民の役に立つ図書館をいかに進めていくのかというイメージがあまりなく、どちらかという従来型の楽しんでもらう図書館というようなイメージをまだ持っている。その辺についてオーテピアやいろいろな団体と組んで、こういうようなやり方ができるということをいろいろお話しした。オーテピア高知図書館の司書にもその際には話に加わってもらった。そういう点では少なくとも館長それから生涯学習の課長は、考え方を変えていただきたらと思う。

潮江分館に行ったが、市立の分館はほとんど行ったことがないので非常に新鮮だった。当たり前だが本はオーテピアとは全然違う並べ方をしており、展示の仕方も違う。住民ニーズに合った図書館という意味でいうと、オーテピアがここにあってそう遠くない場所にある潮江分館があれだけの貸出冊数を出しているのは、やはり工夫等をきちんとされてるからだと感じた。

あえて言えば、あぁいった分館がもっともっと、高知市の中に増えていって地域のニーズをそこがしっかり拾い上げてくれる。そして最終的にそこを通じてオーテピアの資料を提供できる形になっていけば、当然のことながらオーテピアにとっても非常に大きなパートナーを得ることができることを実感した。

以上が県内の図書館を回った感想。

●動画

資料3について、ここで紹介があったYouTubeサイトでの公開開始について、私は司書の快演を観ている。解説のほうが多いが観ています。もの自体は良いので、今後もっともっと使っていけばいい。視聴数やYouTube以外での動画の活用についての方向性など、どういうふうにしていこうと思ってるのかお聞きしたい。

●県立学校図書館との連携

数が増えてきているが、絶対数が2,758冊。数字的に言うと、やはりまだまだ伸びしろがある。できることなら、一校でこれぐらい借りて欲しい。県立図書館で学校に届けるシステムがあり、学校サイドがそれをうまく活用できればこの数字は飛躍的に伸びるはず。その辺のことについてどうお考えだろうか。何か手を打っていることがあれば教えていただきたい。

●ビジネス農業産業支援

資料4の2の移住希望者について、これは非常に大事なポイント。もう一つこ

ここで考えて欲しいのがテレワーク。移住とまではいかないが、最近ではコロナに関係なくテレワークでよその場所で仕事をすることが、だんだん定着し始めている。そういった人たちを惹きつける高知県、高知市であって欲しいし、それに役に立つオーテピアであって欲しい。テレワークに対して、十分に魅力的なコンテンツを提供できることを、いかにPRしていくかを担当課等と一緒に検討しアピールしてはどうか。

●ティーンズ・サービス

情報リテラシーの学習機会の提供を導入しているが、非常に難しい問題だと思う。ティーンズ世代の中で情報リテラシーの学習機会に参加する人たちは、ある意味心配のない人たち。こういうものの存在さえ知らない、存在は知っていても自分には関係ないと思ってる子ども達が当然いる。では、そういう人たちにどう届けたら効果的なのかということについて、教育委員会、学校現場、福祉の方の方々等と話し合っ、より効果的なやり方を検討してはいかがか。

●市町村図書館等への支援

市町村立図書館等における課題解決支援サービス実施への支援を強化するため、動画等であれば離れたところでも研修機会の提供が可能。昨日行った四万十町はやはり遠いと感じた。YouTubeもそうだが、離れたところでも同じように一定の知識が得られるように、充実させていきたい。それは図書館員であっても同じことだと思う。

●高知市全域サービス

サービスもだが分館自体がどういう姿勢で向かっていくのか、オーテピアの利用も含めた分館の戦略を。今のところに留まるのではなく、これらを念頭に置いた上で各館の特性、戦略を考える必要がある。それによって、利用者や貸出数が増えていき、その先にはオーテピアの資料が利用されるという流れを作る。幾つかの館で試験的にやってもらい、そこが良い成績ならノウハウを他の館に提供する。年次的に強力な分館を増やすことを考えてみてはいかがか。

【事務局】

●YouTube、市町村図書館支援

YouTubeの視聴数がまだ十分把握できていないが、把握をしてPRに使っていききたい。市町村立図書館は少ないスタッフで非正規職員、距離もあり集合研修に参加しづらいというお声を聞いていた。短い研修動画をたくさん作って、いつでもどこでも時間のある時に、基礎的なことから、サービスの中身について幅広く学習していただけるようなものを、今年度中に100本作る目標で頑張っている。市町村図書館職員向けだが、当館の新規採用職員や経験年数の浅い職員、民間委託スタッフにも活用してもらい、専門性を深めていきたいと考えている。

●県立学校図書館との連携

数的には約6倍に増えているが、まだまだ少ないと思っている。図書館に対するイメージを変えてもらえるよう、私自身も一緒に学校訪問している。また、学校図書館との連携だけではなくいろいろな形で学校との連携を強化していると

ころ。図書館に対する意識を子供たちも変えてもらうよう、学校側に図書館に来てもらって、高校生向けに図書館活用講座を開くなどしている。18歳の選挙など社会的関心の高いテーマ、学校で教材として使えるもの、生徒だけではなく教職員に対しても役に立つ図書セットも作っていききたい。

●ビジネス支援サービス

移住関係は地域間競争があり、知の競争になってる。資料として、首都圏の地下鉄駅主要駅で配布しているフリーペーパー『メトロミニッツ・ローカリズム』をお配りした。編集長が高知によく来ており、半日はオーテピアで仕事をしてそれから取材に行くという働き方をされている。その方が『図書館移住』についての記事を出してくれた。また、このオーテピアの近くにシェアオフィスもできており、その利用者が図書館でレファレンス・サービスを受けたり資料やデータベースを活用したりできるように、関係課と連携をしながら取組を進めている。

●ティーンズ・サービス

ぽけぱす（ポケット パスファインダー）などを作っている。県立学校との連携にも繋がるが、図書館で資料を貸すだけではなく、子ども達の意識を変えるため、県教員や福祉関係部署と情報共有をしている。ヤングケアラーなどいろんな課題もあり、それは図書館だけでは解決できないので、色々なところと手を繋いで、図書館としての強みを発揮していききたい。

【事務局】

高知市は大合併で、中山間部から海側まで、様々な地域課題を抱えるところに分館分室がある。潮江は地域の図書館として何ができるかを自身で考えられる分館。隣の青年センターの中にある教育支援センターと連携して課題解決支援に取り組んでいる。

高知大学の近くの朝倉分室は大学と連携している。高齢化が進んでいる中、本を貸すことや居場所として地域を見守る役割を担っており、本館とは違う役割を果たしている。これは地域によって取組の格差もあり、本館として一緒に考えていききたい。

本館としては、このオーテピア開館に向けて、必死にやってきたが、分館分室を置き去りにしていなかったかと反省している。分館分室との情報共有や気軽に話ができる間柄を再構築するように努めたい。強力な分館が増えていくと、相乗効果で、オーテピアも分館分室も盛り上がっていくと考えており、少しずつ進めていききたい。

【委員】

全体として、マイナスだとは全然思っていない。第1期サービス計画の期間中にかなりの部分が前に進んでいる。また、県内図書館を回り、オーテピアができたことによって、市町村の意識が変わったところが確かにあると実感した。方向性は全然間違っていない。

【委員】

●合築

委員と一緒に市町村図書館を見学させていただいて、ほぼ同じ感想を持った。このオーテピアの重要なコンセプトである、県立図書館と市立図書館の合築。一般的には、日本の県立図書館と県庁所在地の図書館が、徒歩 10 分も離れてないところにあたりして二重行政と言われても仕方ない状況。地方自治、地方分権を言い訳にして、県内の市町村に対しての支援から手を引いている県立図書館が多い中で、県と市の図書館が一緒になったことによって県立図書館の機能を果たすことが大きなコンセプトだった。今回はその結果を見に行き、努力の結果が出始めていると思った。かつての東京の多摩地区ベッドタウン、千葉県、滋賀県などで新しい図書館が作られたが、高知でもその動きが出始めている。この動きにアクセルを踏んでいかないといけない。それが非常に重要なポイントになる。相互貸借の件数が劇的に増加。県立図書館の職員が、市町村の図書館に行ったときに、その職員の人達とどういう人間関係にあるのかがよくわかる。今回どこに行ってもツーカーで、コミュニケーションが取れていると感じた。この巨大な図書館の運営をしながら、市町村支援も行った担当者たちの努力の成果が出ていると感じた。

ただ、地方の自治体のほとんどの図書館では司書がいるかいないかで、いても 1 人か 2 人。他の図書館ほど交通の便が良くなく、孤立している。そうすると、基本的なノウハウが確立されてなかったり、図書館業界では当たり前なことが、分かってなかったりする。こんなことは分かってるはずだということで、悩んでいることがありそう。コロナ禍以降リモートの会議が当たり前になったので、県からの市町村に対する助言について、曜日と時間を決めて市町村の方たちとリモートで会議をしたりできるのではないかと。通常車で出かけるところをリモートで、定期的に情報提供の時間、質問の時間を定刻で設定をして、市町村支援の職員と市町村の方たちと気楽に情報交換できるのではないかと。高知県と高知市のレベルと、他の市町村のレベルに落差がある状態なので、これは県内の市町村図書館支援の政策の底支えに繋がっていく気がする。

そろそろ、県が中心となって県内の図書館政策を立案していく時期ではないか。形にすることも重要だが、実態的な政策、図書館長がいらないのであれば他の自治体で、中堅の職員を引っ張ってくるとか、広域で専門職雇用などの人事交流など、政策的な動きを県の仕事とする時期になってきているのではないかと。

県立図書館、市立図書館の仕事のうち幾つかは、一般的な公共図書館のレベルのトップに近づきつつある。特に県立図書館は他の県立図書館に比べると、そのうちの幾つかは、トップレベルに近づきつつある。市立図書館のサービスにおいても、トップレベルに近づきつつあるところがある。大きい図書館は、通常の開館業務だけでも大変。貸出し一つにしても新しい仕事として組み立て直さないといけないということを、皆さんは経験されてきた。今までやっていた貸出方式、カウンターも違う、本棚もすごく増えて、ただ開館するだけでも大変な上に、オーテピアの場合は市立図書館と県立図書館と一緒に仕事をしないといけない。

それ以外にもいろいろな新しいテーマに挑戦しないといけないなど、普通の大規模図書館の開館の2、3倍も大変な負荷がかかっていた中で頑張った。その中で幾つかのサービスでは実績を上げつつある。管理職には分からない大変さで、ぜひ管理職の方は職員を労っていただきたい。

●業務の見直し等

それを前提とした上で、サービスの間で差が出始めている。進んでいるところはかなり進んでいるが、例えばティーンズはそれほどでもなかったり、多文化もまだまだだったり。これを一定のレベルに上げていくことが、これからの大きな課題になるのではないか。その中で重要なのは、そろそろ慣れてきた作業など、一定の業務についてはルーチン化をして、心身ともに負担を軽くしていくこと。それと同時にそろそろ業務の見直しをして、重複しているものや無駄な業務を見つけ出してそれをやめていくこと。見直しをしていかないと全体の業務の負荷を軽くできないので、無駄な業務を削減し、ルーチン化できるところルーチン化をして、負荷を軽くしていく。

そして、非正規の人の仕事のレベルを上げて、正規の司書の時間的余裕を作っていく。それがこれからの取り組むべきこと。余裕を作っていくことで、次の段階のAI導入やロボット導入、YouTubeにさらに取り組むことなどに挑戦していくことにリンクしていくと思う。

●高知市全域サービス

高知市内に対するサービスの充実がどのくらい進んでいるか。これはオーテピア設立の目的の大きな柱だったので、これについての分析を進めないといけない。今日いただいた資料ではちょっとその辺が分かりづらい。

オーテピアでの貸出しの中で、市内の人たちの貸出しがどのくらいか。そして、分館分室での貸出しをプラスして、市民に対してのサービス水準がどのくらいになっているかも、そろそろ分析しないといけない。他の県立図書館とその自治体の市立図書館のサービスとの比較をした上で、どのくらいのレベルにあるのか検討しないといけない。人口20万ぐらいの自治体だと、市民の顔ももっとよく見えるが、30万から50万の自治体の図書館サービスはとても難しい。分館分室によってサービスの数値が随分違う点は、字（あざ）別に、登録数や冊数を数字で出して、差が出るのは何かという分析もしないといけないと感じた。

●障害者サービス

視覚障害者の方に対するサービスばかりでなく、聴覚障害の方、発達障害の方に対しての取り組みが始まっているので、これは大変評価できる。重複障害や発達障害、ディスレクシアなど、多様性への対応がこれからの課題になっていくと感じた。

●市町村支援

市町村図書館が県立図書館に一番期待するのは相互貸借。自館で買づらい高額な資料は対応していただける率が高いが、市町村図書館は買づらい本の予約やリクエストに対して非常に苦しむ。自館で買づらい、『絶歌』のような社会的な問題になってる本、政治的な傾向のある本、特殊なコンピュータープロ

グラム本、性的な問題があると指摘されそうなもの等がある。

昔、滋賀県立図書館が難しい本ばかりでなく、市町村が買いづらい本を買って、それを市町村で使うということをやっていた。これは本当に市町村ではありがたい政策だった。皆さんが考えるより以上に、市町村の図書館はありがたく感じており、そういうことを検討いただく時期に来ているという気がした。

【事務局】

サービスの間での差は、ご指摘のとおりすでに数値目標を達成しているものもあれば、これからまだまだ認知度を上げていく必要があるものもある。そこは十分承知した上で、例えば、県立学校の訪問をするときには、県立学校担当だけではなくティーンズ担当も一緒に行くなどしている。自分の目の前の一つのサービスだけを見るのではなく、全体を見るように司書に話している。サービスは個別のものでなく、どこかで繋がっているという視点で物事を考えるように、司書に話をしており、サービスのばらつきは改善していきたい。

一定の業務のルーチン化や見直し、廃止の検討について、これだけサービスがどんどん増えてきていると、スクラップアンドビルドは当然必要になってくる。仕事の効率化、マンパワーやお金など図書館の職員だけでなく外の力を借りることも意識しながら、これからも検討していきたいと思っている。顧客ニーズや時代のニーズに本当に合っているのかを、それぞれのサービス担当者が一人一人、自らチェックしながら、仕事を進められるようにしていきたいと思っている。

【事務局】

相互貸借について、現状の高知県の市町村図書館は、他県の市町村立図書館が通常買っているような本もないので、当館でかなりの数を買わないといけない。高度に専門的とも言えないような本も含めて買わないといけないのが現状。

高知は大都市と離れていて、大学も県内に6つしかなく、教育資源に乏しくて勉強するのが大変。そのため通信課程で学んでいる方が結構いて、県立図書館に勉強しに来る。大学の通信課程の課題で出されたレポートを仕上げるために必要な参考文献も高知にはないと合築前の県立図書館で大分言われた。そのため基本計画では雑誌は最低2000タイトル、本も年間出版タイトル数の半分程度買いたいと要望した。金銭的、時間的な面で通えないから通信過程で学んでいるのに、結局本がないから、本を見に東京、大阪に行っている人の現実があった。そこで資料費もたくさん欲しい、雑誌もたくさん欲しいと要望した。このような状況なので、さらに本を買う時に予算の心配はあるが、県内の市町村の図書館で所蔵していない本の貸出し希望があっても、「ない」で終わらず、「県立図書館から貸してもらえますよ」と堂々と言えるように進めていきたい。

【事務局】

今の説明はとても納得できるが、私がお話ししたのは、専門性の高い本は他の図書館か国会図書館にはある。だから、県内で駄目だったら直接所蔵する図書館

に相互貸借を依頼すれば何とかなる。

私が申し上げたいのは、ちょっと買づらい特殊な趣味の本、普通の人だったら眉を潜めてしまうようなもの、都市部の図書館にもないようなニッチなもので、冊数が多いわけではない。つまり、「こんなものまで貸してくれる」ということが市町村図書館の信頼性に繋がる。だからそういう買づらい本を市町村で買って、その図書館でしか使えないのは資料数の少ない市町村図書館は本当につらい。しかし、県内全部で1冊あればいい、もし他でもリクエストがあればそれを使えばいいとなれば、特に資料費の規模の小さい、市町村図書館のリクエスト係は本当に涙を流して喜ぶだろう。

【委員】

オーテピア本体と分館分室が競い合うように貸出冊数の両輪になっていて、盤石な体制に移行しつつある。

次のステージは第2期計画だが、県立図書館については市町村図書館への支援をさらに強化、市民図書館については分館についてもさらに支援を強化して、オーテピアの本館と分館の関係が発展すれば、分館分室を通じて市民へのサービスも向上する。第2期計画を作ったばかりだが、さらにその先に行くというお話もあり、非常に野心的で素晴らしい。

振り返ると合築も含めて、オーテピアが新しい図書館になるという背景も、基本的には高知県の置かれている状況は全国平均からして厳しいところで、全国最下位レベル。図書館に限らず、例えば産業振興の観点からも、非常に頑張っていないといけない状況下で、オーテピアが第1期に続いて第2期のサービス計画範囲でも、非常に重要な役割を果たすだろうと伺っていた。

それぞれの方策については、順調に進展をしているように思う。R8年度目標をすでに達成してるものが幾つもあるので、そういったものの見直し。点数や件数という数値指標ではなく、質的な良さを評価に入れていけないかということが、今後委員会のお話にもなるのではと思っている。

今後とも進展が期待できそうで、図書館関係の皆さん本当にお疲れ様でした。

【委員】

3委員の方々のご意見を伺い、なるほどと思った。計画推進のための最大のポイントは、まずは計画の周知徹底を図って、関係者、利用者の方のご理解をいただくという、2点。

計画自体は非常によくできたものだが、計画実施のための具体的な戦略の検討がこれから一番必要だろう。そのためのヒントに関しては3委員の方々が非常に貴重なご意見を示してくださったので、それを参考にしていきたい。

そもそものオーテピア設立の理由、その時の基本計画の方向性の確認。本来の、もしくはこれからの図書館の果たすべき役割、目的、館員や司書のスキルアップ能力の向上とそのために必要な研修活動、その他。そういうところも含めた、非常に広い意味での目標達成のための戦略の具体化がポイントになるだろう。

重要なお指摘があったように、今のままの働き方だけではおそらく時間が足らなくなるであろう。そのために、働き方改革、合理化。オーテピア高知図書館が高知県の中心となって進めなくてはならないかもしれない、いわゆるDX化問題で、それまでも含めた、非常に幅広い計画達成戦略を練って頑張っていたきたい。

以上で、まとめとする。

事務局は委員の方々から出た意見を十分踏まえて、今後の図書館運営を進めていただくようお願いする。

議事 ③その他

【事務局】

次回開催は本年10月の開催を予定している。

8月末時点での計画の進捗状況についてご意見をいただく。年度後半の取り組み、また、予算要求の内容はすでにこの時点が固まっているが、その後の予算折衝や執行の部分において参考にさせていただきたい。

(以上)